

低体重で生まれた女性は、妊娠高血圧症候群^①になるリスクが1・5倍に高まるとの調査結果を東北大の研究チームがまとめた。京都市内で20〜22日に開かれる日本疫学会で発表する。

調査は、住民の健康データに関する東北大の研究の一環として行われ、2013〜17年に参加した宮城県内の妊婦のうち、自身の出生時の母子健康手帳が残っている4810人が対象。

「低出生体重」（2500g未満）だったグループ（225人）や、「標準出生体重」（2500〜3499g）だったグループ（3742人）などに分類し、それぞれの妊娠高血圧の発症割合などを調べた。

その結果、低出生体重だった妊婦の15・6%が妊娠

出生時に低体重▶ 妊娠高血圧 ご用心

リスク1.5倍に 東北大調査

高血圧を発症。年齢や喫煙などの影響を除外して解析したところ、妊娠高血圧になるリスクは、標準出生体重だった妊婦の1・5倍だった。

さらに、低出生体重だった妊婦について、妊娠前の体形別に分析した結果、肥満（BMI25以上）とされた妊婦が妊娠高血圧になるリスクは、標準出生体重だった妊婦の5・9倍に上った。

た。痩せすぎ（同18・5未満）の場合も、リスクは2・3倍だった。

その一方で、低出生体重だった妊婦でも、妊娠前に標準体重（同18・5〜25未満）を保っていた場合は、標準出生体重だった妊婦とリスクに差はなかった。

調査結果をまとめた菅原 準一教授（産婦人科）は「出生時に低体重だった女性が妊娠した時の健康リスクが示されたが、大人になって標準体重を維持していれば、リスクを下げられることもわかった。日常生活の中で予防に気を配ることが大事だ」と話している。

妊娠高血圧症候群 主に妊娠20週以降に認められ、かつては妊娠中毒症と呼ばれていた。母親に脳出血や肝臓・腎臓障害などが起きることがあり、胎児に危険が及ぶケースもある。